

# 老舍研究会会報 第25号

胡絮青女士 題字

## 献 词

—祝贺日本老舍研究会会报出版 25 期—

中国老舍研究会顾问  
北京老舍研究会会长  
舒 乙

《日本老舍研究会会报》出版二十五期了，这是一件了不起的事，值得热烈祝贺！说它了不起，起码有以下四个原因：

第一.《日本老舍研究会会刊》是世界上迄今为止唯一一份常年出版的老舍研究专刊，中国没有，其它地方也没有，它是唯一的，这个事实本身就说明这个刊物有多么重要，的确非常了不起。

第二.《日本老舍研究会会刊》在正常情况下基本上是每年出版一期，正像日本老舍研究会基本上每年要举行年会一样，《会刊》和年会是相配套的，是一对孪生兄弟，证明日本老舍研究会不仅存在，而且能够正常开展活动，当然，它也是日本老舍研究成果的忠实记录。日本老舍研究界有一支十分可爱的队伍。这支队伍有很大的凝聚力，有韧劲，有恒心，雷打不动，从不动摇，从不散伙，坚定地向前走，教我打心眼里佩服，肃然起敬。

第三.《日本老舍研究会会刊》有相当的学术价值，它刊载了大量日本老舍研究会会员的研究论文，作者不下五十多位，论文数量多达

百篇以上，此外还有《老舍关系文献略目》和《事务局动态》这样的常设栏目，前者具有学术的工具性，后者具有史料性，都是很有用的信息，集少成多，有着系统性，对世界范围内了解老舍研究概况大有益处。

第四.《日本老舍研究会刊》和中国老舍研究界有着十分密切的关系，是一架很好的沟通桥梁，通过这座桥梁彼此增进了了解，加强了交流和友谊，谱写了一曲动人的日中友好的歌，应该说它很好地继承了老舍先生的宏大的博爱精神。

在这里，我要特别向日本老舍研究会的几位前辈，向已故的柴垣芳太郎先生、藤井荣三郎先生表示深深的缅怀，对日本老舍读书会发起人中山时子先生，对日本老舍研究会第三任“代表委员”杉本达夫先生、第四任“代表委员”日下恒夫先生等表示特别的敬意，他们执着的奋斗奠定了今日的日本老舍研究会的一切。眼下我希望在仓桥彦彦“代表委员”的主持下，《日本老舍研究会刊》能一如既往，昌盛发达，越办越好！

2011年7月29日于北京

「代表委員の一言」：

先の年会案内で御承知のように、本年度の大会では舒乙先生に特別講演をお願いいたしました。また先生にはお忙しい中、25号記念号発行に際し「献詞」まで頂戴いたしました。この場を借りて厚くお礼申し上げる次第であります。

## 藤井栄三郎先生と永遠に…

渡辺武秀

2009年に、老舎研究会の代表委員であった藤井栄三郎先生が亡くなられた。このことを不覚にも昨年知った。愕然とした。私は藤井先生のファンだったのだ。

先生がこの会に多大なる貢献をされたことは言うまでもなく、個人的にも老舎についていろいろ教えて頂いた。先生はお話が上手で、独特の切り口の作品論はとても面白かった。特に懇親会でのお話は最高だった。研究会の度にいつもこれを聞くのを楽しみにしていた。(たぶん気づかれた方はいないと思うが)秘かに先生の近くに席を取り、少しキーの高い声に聞き耳を立て、永遠に懇親会が終わらないことを願っていた。

したがって、この度、まだこの藤井先生の訃報をご存じない方々にこの「こと」をお知らせすると同時に、この誌上にも藤井先生を記念するものを残すべきであると考えた。このために、この今回の「会報」に、藤井先生について最も詳しい方に、先生に関する文章を書いて頂き、それを掲載したいと思ったのである。そこで、いろいろ考えた末、先生のご子息の宏氏に「父上」について是非文章を書いて欲しいとお願いした。氏はこれに快く応じて下さった。(渡辺)

### —— 父の思い出 ——

藤井 宏

渡辺武秀先生から、遺族の立場から父のことをちょっと書いてほしいとの依頼を受けたので、少しだけ思い出を書かせていただきたいと思う。

父は昭和2年(1927年)5月12日に生まれ、一昨年2009年の10月5日未明に胃がんで亡くなったのであるが、普段から胃は丈夫な人だと思っていたし、最初に異常を訴えるまではとてもよく食べていたので、まさか手術のできないほどの胃がんだとは思っても見なかった。病状の説明を聞いて、抗がん剤の治療が始まってからも、自分の病気がどう変化するか関心を持っていたようで、そういえばまだ元気が残っているうちは、検査のことや検査機器のことなどを辞書で調べたりして、「うん、MRIとはこういう言葉の略か」などと納得していたようである。

戦争中に勤労働員で出かけた工場で、作業をしていたらどろどろに溶けたはんだが目にはびっと飛んできて、「あっ、だめだ。」と思ったら、はんだは眼鏡のレンズいっぱいにはひっかり、気がついたらレンズだけがなくなって目は無事であったとか、自分たちが工場を立ち去った直後に空襲があって、その工場が全滅したとか、若い時分に、駅のホームで電車を待っていたとき、電車が入ってきたので考え事をしながらそのまま乗り込もうとしたら、電車とホームの隙間に丁度すっぽりと落ち込んで助かったとか、そういう話を聞いていたので、ひょっとしてそういう奇跡がもう一度起こるのではと、そんな期待もちょっとないでもなかったが、やはりそれは無理であったようだ。

子供のころ静岡に住んでおり、死ぬまで静岡のことを懐かしがっていた。子供時代、冬になると近くの池が氷結し、学校から禁止されていたにもかかわらず、よくアイススケートに行っていたのだそうであるが、あるとき大人の人が寄ってきて、「ぼく、スケートがうまいねえ。ちょっとポーズをとってみて」といわれて、喜んでポーズをとると、なんと、翌日の新聞に「あぶない！やめよう、池の上でのスケート」とか何とかいう見出しで、その写真が地方紙の紙面にかなり大きく載っていたので、「大人はずる

いなあ。」と思ったそうである。

一方、子供の頃からずいぶんませた子で大人向きの雑誌なども読んでいたらしく、修身の時間に「兵隊さんは死んでもラッパを離しませんでした。なぜだと思いますか。」と聞かれて、「はい、それはたぶん死後硬直だと思います。」と答えてたいそうしかられたとの事である。亡くなる前日まで苦しそうに自分で立ち上がってトイレに行く様子を見ていると、そういうところが死ぬまで変わらなかったのだなあという気がした。

昔の人で、古くから学校に携わってきた人なので、堅苦しさや気難しさは多かったが、あの戦争の時代をまがりなりにもまじめな気持ちを持って生きた人なりのことはあったのかなあという思いがする。

父の世代で現代の中国の文学に興味を持つのは、ずいぶん珍しい事と思うが、そういう人ならではであろうか。子供のころラジオから流れ出てくる「上海より現代支那の著名なる作家魯迅氏が重態との報が入ってきております。」というアナウンサーの声を聞いて、子供だった父は「“ロジン”というのはいったいどんな字を書くのだろう」と思ったことがあるそうで、ひょっとしたらやはり何か縁があったのかもしれないという気がする。

葬儀は家族葬を執り行い、棺には老舎短編集と、英詩のアンソロジー、それに方丈記を納めておいた。なお、最後になりましたが、老舎研究会の皆さんには、父が生前、大変お世話になりました。

「代表委員からのもう一言」:

藤井先生には第二代表委員として二期6年もの長きにわたり、老舎研究会の運営に御尽力賜りました。この場をお借りして、遅ればせながら心より哀悼の意を表させていただきます。

## 老舎の雲南旅行のこと

杉本 達夫

07年の本研究会大会で、わたしは「老舎の雲南旅行」と題して口頭発表した。その後漢語で論文化して、中国の学会に提出したのであるが、日本では文章化していないので、この場を借りて、その骨子をやや随想風に綴っておこうと思う。

1941年秋、老舎は西南聯合大学の招きを受けて雲南に飛び、8月26日から11月10日までのほぼ2か月半を、おもに昆明で過ごした。招請の声をかけたのは、大学行政を主管していた梅貽琦（清華大学校長）である。かれは重慶で老舎と会って意気投合し、かつ、その苦境を知って、老舎を暑い重慶に留めるより、涼しい昆明に招いたほうが、老舎ばかりでなく、文芸界のためにもなると考えたのだという。そして老舎は喜んで招きに応じたが、応じるに当たっては、旅費以外、報酬は受けないと断りを入れたという。

1941年当時の老舎の生活は、“貧・病・忙”の3字で概括できるだろう。老舎は文協の活動に専念すべく、定職に就かず、収入は原稿料に頼っていた。栄養不良、貧血、目まいに加えてマラリアを患っていたが、医者にかかるゆとりもなく、結果は病気が募って、執筆を妨げ、公的活動を制限した。病めば書けず、書かねば稼げず、病はつもの。悪循環なのである。さらに、この年1月には皖南事変が起きて、政治上の国共合作は完全に崩れ、左翼の作家たちがつぎつぎ重慶を離れて、文協は中核となる戦力を失った。活動の戦力ばかりか、資金的にもいよいよ追いつめられたことと思われる。この年から、文協の機関誌の発行回数が大幅に減る。

老舎は文協の支柱であり、役割は全般にわた

るのであるが、とりわけ重要かつ難しかったのが金策である。文協の財政は国民党と政府の機関からの補助金に依存していた。機関の決定と執行は別物である。補助金の約束は、そのまま支給を意味するものではない。補助金は政策と無関係ではありえず、合作がやぶれた政治環境の下では、厳しさはいうまでもない。さらには、老舎は一切語らないことであるが、当時の官僚の習性として、わずかな支出からもピンハネないし賄賂を求めたのではないのだろうか。

文協の使命、病苦、貧窮、そうした苦勞のさなかに、老舎は昆明へやってきたのである。

西南連合大学では9月8日から、「抗戦以来の文芸の発展のすがた」と題して、4回の連続講演を行った。初日には会場の窓にまで、聴衆があふれかえていた。講演題目は、

- 第1回： 文芸界の動向
- 第2回： 抗戦以来の文芸の発展の概況。  
民族形式問題。
- 第3回： 文芸各分野の発展の様相——  
報告文学と小品文。抗戦以来の  
小説。詩歌。
- 第4回： 文芸各分野の発展の様相（続）  
——詩と朗誦。抗戦劇。

となっている。各回の講演の内容は、いま『老舎全集』第17巻に収める同題の一文によって知ることができる。が、これは聴講した人物が記録したものであって、老舎本人が書き残したものではない。老舎はあるいは原稿なしで語ったのかもしれない。

老舎の話はきわめて具体的であり、ことばが生きている。西北を巡り、戦場を訪れて得た経験、大後方文芸界の中核にいて得た知識、それらを土台として、老舎は実践者、組織者、戦士の視点で抗戦以来の文芸運動を振り返り、現状を分析し、今後の方向を探った。全体を語るとともに、自らの歩みを点検していた。老舎の講演

にはいくつか注目すべき点がある。たとえば言語と音声に対する感覚である。たとえば民族形式に関する見解である。実際に民族形式作品をいくつも書いて、その実践から引き出した見解は、いわゆる民族形式論争に現れた理論とは、重みも味わいも大いに違う。また、作家の生活の場所を巡る見解は、胡風の“作家のいるところに生活はある”とする主張と、重なり合うようにわたしは思う。

昆明では幼なじみの羅常培があちこち案内してくれるはずだったが、その羅常培が病に倒れてしまった。そこで老舎は出歩くかわりに、羅常培の病床に付き添いながら、話劇歌舞混合劇『大地龍蛇』（3幕5節）に着手した。9月3日に書き始めて、10月7日に書き上げている。老舎は重慶で東方文化協会から、“東方文化”をテーマに話劇を書くよう委嘱されていた。また、沙漠のかなたの友人から、「漢、回、蒙の合作抗戦をテーマに話劇を書いてくれ」と頼まれてもいた。本劇はおそらく、それらの要望に応じて書いたものであって、昆明に来る前から構想は膨らんでいたであろう。

“東方文化”とは何かという、茫漠たる哲理を舞台上に形象化すべく、老舎は苦心した。固有文化の価値を知るとともに、抗戦を通じて明らかになった自らの文化の欠陥を正すべきこと、アジア各民族が覚醒し、真の平和を戦い取るべきこと、等々を、人物のことばと行動で形象化しようというのである。この劇には、国内諸民族と日本を含む外国人が列を組んでいること、インド人医師が登場することなど、39年の西北旅行で得たと思いき見聞が、あちこちに採用されている。興深いのは第3幕で、民国50年（1961年）という未来の社会が設定されていて、41年段階の老舎が希求する中国の未来図、すなわち、葛藤のない世界、政治闘争も主義の対立もない世界、誰もが思う道を選んで存分に働ける世界、

ことごとに 41 年と正反対である世界を覗きうることである。換言すれば、老舎の現状への不満と怒りを、逆説的に吐露しているのである。

劇は抗戦に身を投じた老舎が、抗戦に献身する活動の一環として書いている。描かれる平和は、いま抗戦を戦っている中国を中心とした平和であり、文化は中華文化を頂点とする精神の秩序である。つまりは中華本位の観念であって、時代環境の色彩が色濃く出ているように思う。

書き進めながら読んで聞かせ、意見を求めて修正する、というのが老舎の執筆の常である。本劇もまた同様の方式で執筆が進んだ。昼間書いて、夕食の後、周囲の人々に読んで聞かせ、意見を聞いて手直しし、それを何度か繰り返したそうだ。およそ雑音のない文化の森で、教授や研究生に読んで聞かせ、反応を修正に生かしてゆく。それは老舎にとってどんなに楽しい時間であったことか。そして、口を出すことで劇作に参加した人々にとっても、老舎と語り合うことが、いかに新鮮かつ刺激的であったことか。ただ、劇の出来栄えはといえば、わたしは感心しない。意見を述べた人々も、老舎とともに過ごす時間が得難いのであって、劇そのものに惹かれることはなかったのではあるまいか。

昆明を去るに先立ち、老舎は数日、大理地方を訪れて現地声を聴き、幾度か講演した。この時の旅の様子は、「滇行短記」（全集第 14 巻）に綴られている。人々が図書に飢えている状況は、2 年前に西北で見たのと同じであった。こうした状況に対して、老舎は作家の配慮の必要を説くが、これは作家の問題ではなく、流通の問題であるだろう。旅の足はトラックである。この時期、トラックは貴重な運輸手段であり、運転手は高級技師だった。助手席に陣取った老舎は、悪路泥濘に身を揺すられながら、運転手と打ち解け、たつぷりと知識を仕入れた。この運転手はその後、崖からの転落事故で命を落とす。

『四世同堂』のなかに、銭老人の息子が、日本兵を運ぶトラックを運転して、故意に崖から落ちたと書かれていたが、この運転手の事故が小説中に、そういう形で反映されているのではあるまいか。

昆明での日々、羅常培は病に臥せたものの、教授たちは老舎を歓迎し、濃密な交流が生まれた。当時、大学教員もまた物質生活は悲惨な状況にあった。教授の給与を示すおもしろい資料がある（『国立西南聯合大学史料』第 4 巻。雲南教育出版社）。それによれば、1937 年上半期を 100 とした生活指数は、41 年下半期には 2357 に達している。37 年上半期に平均 350 元であった教授給は、41 年下半期には 770 元である。37 年に換算すれば 32.6 元であって、1 割以下に下がっているのである。専任講師は教授の半分、助手は教授の 3 分の 1 が相場である。これでは日々の食を得ることさえ容易ではない。老舎は宿で学生たちと食事を共にしていたが、教授たちは乏しい中からあれこれ料理を作り、老舎にふるまってくれたのだった。

昆明で、老舎は目まいもなく、マラリアの発作も起きず、監視の目が纏いつくこともなく、友情にあふれた人文的雰囲気の中で、ゆっくりと、のびやかに執筆することができた。貧しく図書もなく、劣悪な条件の中で研究教育に携わる人々、苦難に屈せぬ硬骨の文人たちは、老舎と志を同じくする人々といつてよい。老舎はその人々から、貴重な肉体の栄養ばかりか、精神の栄養をもたつぷりと受取っていたのである。

(2011. 7. 16.)

〈編者注〉：

杉本達夫会員が「漢語で論文化して、中国の学会に提出した」とされるのは「老舎の云南旅行（1941 年秋天）」（『西南联大与现代中国研究』人民出版社、2008 年 10 月）のことである。

## 2011 老舎の北京

石井 康一

○昨年9月17日から今年の3月14日まで、半年間の在外研究で北京に滞在した。この期間中の老舎に関する出来事を報告したい。

○2月3日、旧暦の1月1日であり、また老舎の誕生日でもあるこの日に、気合を入れて老舎記念館を訪れた。すると中庭には数多くの「灯谜」が。3つ解くと博物館フリーパスがもらえるので挑戦した。

老舎（打一外国地名）あ、これわかります。「名古屋」ですね。

ZHANG（打一老舎作品集）「老張的哲学」？ すっきりしないなあ・・・あっ、わかりました「出口成章」です。

三月桃花九月果（打一老舎作品集）作品集ではなくて話劇ですけど、「春華秋実」で問題ないでしょう。

これでやっと賞品を獲得できました。そのほかには、

水汽将尽（打一老舎篇目）

华夏之邦高于天！（打一老舎篇目）

逃命（打一老舎篇目）

海棠烂漫深宅中院（老舎作品一）

戊末亥初（打一老舎作品集）これらの解答は文末に。

○話劇「四世同堂」（1月13日—28日）天橋劇場。長編小説を舞台に仕立てたが、いささか消化不良気味だった。改革開放時期に老舎が国民的「人民芸術家」として一般庶民に広く認知されるようになったのは、85年の「四世同堂」テレビドラマ化が大きく寄与していると思われる。話劇版「四世同堂」も今後、手を加えての再演に期待したい。

○話劇「老舎五則」（1月1日—9日）国家大劇院。北京人民芸術劇院の林兆華演出で「柳家大院」「也是三角」「断魂槍」「上任」「兔」5つの短

編小説をオムニバス形式の芝居にしたもの。舞台上方に字幕が出ていたので、話劇もついに字幕付きになったかと驚いたが、この公演に限ったことだった。会場で販売している本にはノーカットの舞台と制作過程をおさめたDVDが付いていて、脚本も老舎の原作小説も収録したすぐれモノ。30年代の小説作品に新しい老舎の価値を見出そうとする試みは成功していたと思う。

○2月、北京人民芸術劇院「茶館」（首都劇場）は4回見に行った。1999年に始まる林兆華演出の舞台は2005年から焦菊隱演出版に戻り、林兆華は「再演芸術指導」に回っている。主な役柄は99年から同じ俳優が演じている。ちょうど春節の時期で、外の花火や爆竹が劇場内にも鈍く響いてきて、特に城外で軍閥が戦闘している第2幕にはびったり合っていた。

○気が付いた点をいくつか。まず、一部の脇役を同じ俳優が演じているのはよくない（第二幕の巡警と第三幕の方六など）。老舎は劉麻子と小劉麻子など5組の親子二代を一人の俳優に演じさせ、善人は生きにくく悪人ばかり栄える世を象徴させている。その効果を弱め、「これも親子なのか」と観客を誤解させる可能性がある。外国公演や地方公演など俳優の人数に限りのある場合は仕方がないが、老舎の狙いを壊しているのでアウトだ。

○第1幕の松二は「真是！真是！」と脚本にない台詞を連発し、席を立つとき常四が払うように仕向け、喜んで「让您破费了」などと言って、笑いを誘っている。役の新しい工夫は認めなければならないが、舞台のアンサンブルを乱し、人物像を逸脱している。これは老舎の笑いではない。老舎のユーモアではない。

○康順子はダブルキャスト。宋丹丹は笑いの帝王趙本山とのコントで東北訛りのおばさんを演じてテレビで有名な女優だが、彼女の康順子は、なまっている。リアリズムで考えるなら農村出

身の康順子のなまりは分からないわけではない。しかし、もう一人の龔麗君が従来通りの普通話の台詞だったので、見る日によって舞台の印象はかなり異なる。

○83年の日本公演を4回見て、一昨年、去年、今年と北京で10回見たが、何度見ても飽きることがない。「茶館」は面白い。初演から50年以上がたち、時代とともに観客は変わり、俳優も変わる。当然舞台も変わっていくのだが、高い完成度を示した舞台が無原則に崩れてしまうことには賛成できない。これからも見続けていきたい。

(灯謎の答えは順に残霧，国家至上，偷生，紅大院，月牙兒集＝十二支は月にも対応し，戌は旧暦9月，亥は10月，月末月初の月は当然三日月)

## 老舎に魅せられ取り組んだ七年間

吉田 世志子

私事ながら昨秋、学位論文「老舎の生涯－創作への愛執－」をどうにか完成させた。関西大学大学院に社会人入学してから7年目である。しかし老舎論を描きたいと決意したのは2001年であるから、実に10年がかりで出来たのである。またここまで来るには、節目節目で、得がたい師との出会いがあった。この点を抜きにして私の論文の完成はなかったのである。そこで、この紙面をお借りして、還暦になってから、老舎に魅せられ取り組んだ経緯と、論文執筆の過程について述べさせていただきたい。

### 1. なぜ老舎か—『駱駝祥子』にひと読みばれ

50歳過ぎまで高校の国語の教師をしていた。日本文学の古典を教えるたびに、これらの古典は中国文学の影響なしには、成立しなかったことを痛感していた。いつか中国に行きたいと思

っていた。こどもが社会人となり、4人の親を見送ったら還暦になっていた。チャンス到来と北京外国語大学に語学留学した。1年の予定だった。中国語はカルチャーセンターに週一回2年間通っただけで、どうにかピンインがよめ、簡単な日常会話を理解できる程度であった。

「初級5」の教室で学び始めて四ヶ月目、テキストに老舎の『駱駝祥子』の抄訳があった。祥子は車を盗られ、妻も子供も亡くし、また車を無くした。さらに小福子を失っても、老舎は祥子を生かし続ける。この“活きる祥子”を描く老舎の凄まじいまでの筆力に圧倒された。さらに読み続けると漢字が、言葉が、一つずつ、リズムカルに、きりっと頭をあげてくるような文体。これが北京語なのだ。世に一目惚れという言葉があるが、それに擬えていえば、私は老舎の作品にひと読み惚れしたのである。

私が中国文学でよく読んだのは魯迅であった。老舎の作品は読んだことがなかった。老舎についての知識といえば、開高健や井上靖等の文章を読んで「文化大革命の始まった1966年に紅衛兵に殴られて自殺した」ということだけだった。それを読んだときの印象では、作家なら「創造力の世界にかかわる限り見るべきほどのことは見つ」べきではないか。文革が始まったばかりのときに、早々と逝ってしまうとは？とどちらかといえば否定的なものだった。だが『駱駝祥子』は、この老舎観を打ち砕いた。これは私が思い違いをしているにちがいない。この作品と老舎の最後とはあまりにもかけ離れている。この間に横たわる何かがあるはずだ。この深淵を追求したい。お腹の中から熱いものがこみ上げ、やがてそれは私の身体中に広がった。

### 2. 関西大学大学院と日下先生との出会い

夏休み日本に帰って、カルチャーセンターで中国語を教えてもらったF先生に相談した。先生は即座に「テーマがはっきりしているの、

大学院に行ったらいい。関西大学中国文学専攻の日下恒夫先生のところに行くように」と勧められた。

次に私は家族を説得して、留学期間を後1年延長することにした。1年の留学では、老舎はとて読めないと判断したからだ。

留学2年目の夏休み、日下先生あてに手紙を描いた。秋になって先生からのメールが北京に届いた。長い懇切丁寧なメールで「歓迎します。11月に社会人入試があるので受けるように」と言ってくれました。

10月の国慶節から一週間、大学は休みになる。これを利用して留学生は旅行する。しかし私は、受験のために寮に残って勉強していた。そのとき、再び日下先生からメールをいただいた。「日本も寒くなってきました、北京はよほど寒いでしょう」で始まり、試験問題の傾向と対策を描いてくださっていた。北京の10月は本当に寒いのだ、暖房が11月からしか入らないためである。「地獄に仏」とはこのことだと思った。かじかんでいた手が暖かくなるようだった。なにがなんでも関西大学大学院に受かろうと決意した。

### 3. 修士論文で立てた仮説

修士論文は1950年までの、老舎の長編小説を取り上げることにした。これらの作品では、自殺が必ず出てくる。そこで私は一つの仮説を立てた。老舎を創作に向かわせた性向として「自殺」があるのではないか。とすれば文化大革命はその実行の契機に過ぎないとも考えられる。日本の作家の場合—太宰治、三島由紀夫、川端康成などは、世の中がどうあろうとも、そもそもその作品のなかに自殺に向かう性向があったように一と推測したのである。それで老舎論の方法も、日本文学のそれのように、作品分析を積み重ねて、そこから帰納した作家論を構築しようとした。しかし、作品分析を積み重ねていった結論は、私の仮説を裏切るものだった。修

士論文の最後で、1950年までの小説にみる老舎の死生観として以下のように結論づけざるをえなかった。

「老舎は、『趙子曰』、『二馬』、『猫城記』、『四世同堂』で、さまざまな状況の自殺を描いた。まず知識人の男性の場合は、国事に関わる事件による自殺行為である。国家存亡の危機の中での、やむにやまれぬ「自殺」を描いたのだ。中国が半封建、反植民地的状態にあり、軍閥が割拠し、さらに日本の侵略による危機的状況でなければ、このような自殺の描写は成立しなかったのである。

「老百姓」は、自殺など考えず、ひたすらその日、その日を生きていく。老舎は、車を取られ、妻と子供を亡くし、最後のささへの小福子に自殺され、それでも生き続ける祥子を描いて成功した。祥子はどんな困難に立ち至っても、死のうなどとは考えないのである。ただ彼らが命を賭けても守り抜くのは、自らの面子である。その面子をたたきつぶされたとき、常二爺やその息子、李四爺のように命をもちえりみず行動にでる。これが中国人の気骨である。このようにみてくると、老舎が自殺に付加している独特のメッセージを読み取ることができる。よりよく生きたいと思えば思うほど、「自殺」という結論に導かれる。この「生」と「死」の二律背反に陥る。自殺を思うことは、真摯な思考の証なのである。これらは、最終的に自殺するという行為にだけ焦点が当たっているわけではない。自殺しようと思うほど、苦悩し、解決を見出そうとするその姿勢にあるといえる。老舎は他に解決の方法はあるのに、自殺に逃避する、あるいは破滅的に突き進むという思考をしていない。老舎自身の中にペシミストの面影がないとはいえない。それをユーモアや諷刺で表現することで相対化できた。さらにバランス感覚はある。つまり老舎の思考の中で自殺は、どのように生きたら良いか、どう生きるべきかを考える思索



の中のひとつつながりの自然な発想なのである。そして、小説の重要な箇所、その発想を生かし、「自殺」を描くことで、作品を重厚にしている。「自殺」は作品の質的転換の装置なのである。以上の作品をみてきた限りでは、老舎自身のなかに現実の困難から逃れるために自殺を指向したり、何事も厭世的、破滅的な方向に流れやすい性向があるとは考えられない。

これで振り出しに戻ったわけである。『駱駝祥子』から1966年の老舎の自殺の間に横たわる深い深淵を見出すためには、1950年以降の作品に踏み込まねばならない。このとき修士1年のとき、私の老舎に関するレジュメを閲覧になった日下先生がおっしゃった言葉を思い出した。先生は「修士論文は1950年までの作品を取り上げたらいい。50年以降は博士課程で取り上げたらいい。まだ50年以降は誰も描いてないから、博士論文になる。老舎は共産党の厳しいしめつけの中でも、きっとその隙間をぬって、描きたいことをかいているはずだ」と仰ったのである。そのとき私は、目先の修士論文が描けるかどうかと不安でいっぱいだったので、博士課程など考えられもしませんと言いそうになった。すると先生はそれを見透かしたように「まあ急いで結論を出さなくていい。そのうち考えも変わるから」とおっしゃった。なんと1年後、その通りになったのである。

#### 4. 博士課程での試行錯誤

日下先生は独特の指導方法を持っておられる。やっていることがレベルに達しない場合、死ぬほど優しい声で論評される。しかし眼は笑っておらず、鼻とあごが上を向いている。次にある程度してきたことを認められた場合、認めるところを評価するのでなく、足りないところを酷評される。そのとき眼は光り、鼻とあごは下を向いている。これを院生はとても恐れていた。しかし人は40歳出来ていると評価されるより、

60歳出来てないと言われた方が、やる気のある者なら発奮するのだ。私はこれを日下式挑発指導法と密かに名づけていた。博士課程1年のとき、私もこの挑発指導法の洗礼を受けた。

春休み中、1950年代の共産党の文芸政策や胡風事件、老舎の置かれた立場などの本を読み、4月最初の発表で、自分なりに出来たつもりだった。だが先生は一言「こんな発表はちょっと本を読めば誰でも出来る」と、口をきりつと引き結び、眼光鋭くおっしゃって授業は終わった。

その晩私が眠れなかったのはいうまでもない。私は暗い天井を見上げて、考え続けた。「誰でもできる」ということは、裏を返せば「誰にも出来ない事をやれ」ということで、つまり私にしか出来ないことをやれということだ。そこで修士論文の発表のとき、先生はこのようなことおっしゃらなかったことを思い出した。あのときは「作品分析を積み重ねることにより、作家論にいたる」をモットーに、作品分析を繰り返してきたのだった。これが私にしか出来ないことではないか。というより私にはこれしか出来ないのだ。そう考えるとほっとして、どっと疲れが出て、翌朝昼近くまで熟睡した。

翌日から早速、改めて論文の基本方針をたてた。それがこのたび提出した論文の序論にあたる。

「文化大革命で多くの人々が自殺した。老舎もそのひとりである。それ以後40年余り経ち、自殺したほとんどの人々は名前すら忘れられた。だが老舎の名前は永遠に記憶される。彼が中国文学史上比類ない作品を残した作家であるからだ。老舎の自殺をいつまでも記憶にとどめるには、彼の作家としての歩み抜きには語れないと思うのである。自殺にいたるまでに、40年に及ぶ著作活動をおこなった確固たる生涯があるのである。この40年間の老舎の作品を詳細に分析することにより、これらの作品から帰納した老舎像とひとつつながりのものとして、老舎の自殺

を捉えたい。

1950年以前の作品から、『老張的哲学』、『趙子曰』、『二馬』、『猫城記』、『離婚』、『駱駝祥子』、『四世同堂』を取り上げる。個々の作品分析を積み重ねることにより、作家論に迫りたい。また1949年中華人民共和国成立以降は、『方珍珠』、『龍鬚溝』、『春華秋実』、『西望長安』、『茶館』、『義和団』、『正紅旗下』の作品を主に取りあげた。50年以降老舎は、共産党の文芸政策に沿って創作することを余儀なくされた。したがって50年以降の作品分析をする場合は、共産党の文芸政策と摺り合わせてみていく必要がある。これらの方法で作品分析を積み重ねることにより、『老舎とはどのような作家だったか』という作家論にたどり着きたい。さらにここで構築された作家論を踏まえて『このような作家』が1966年8月23日に遭遇したと、その後の24日の老舎の行動の意味を問いたい。」と位置づけた。しかし主眼はあくまで作家論である。老舎の自殺について調査したり、その理由について断定したりすることではない。

上記のように方針を定め、老舎の作品についてのエッセイ、文学論を読んでいった。そこで老舎が自らの作品論の行間に込めている意味に気づいた。老舎は共産党の幹部が文学内容にいかにか口出しするかを巧妙に描いている。たとえば『我怎么写《春華秋実》剧本』では「北京市人民芸術劇院は、第十稿に基づいて稽古をした。脚本の内容に関わる問題はとても重要なので、全ての劇毎に稽古の時でさえ、劇場側は指導部と専門家を招いて批評を依頼した。彼らは随時、大は原則に関わる問題から、小は一言一字に修正意見を出しただけでなく、そのうえ、時には作者と演出家に関係する問題を詳しく話すように促した。……私は至れり尽くせりの激励と援助を得た……幹部はさらに婉曲に私に言った。『この一場面は多分欠点がある』高級幹部たちはこのように作家の身になって思いやり、芸術

を熱愛するのである！……このたび高級幹部の指導と激励を経て、以後私が物を描くとき、気を大きく持たねばならない。政策を説明して明らかにするので満足するだけでなく、芸術を窮屈な思いにさせるべきでない」と、慇懃にのべている。これは、党の高級幹部は政策だけでなく、あらゆるところに干渉した。今回高級幹部の“指導”と“激励”を経て、窮屈な思いにさせられましたよと、言っているのに等しい。さらに「以後気を大きくもたねばならない」とは、創作した作品に対する“助言”という干渉に、くじけない、ひるまないともとれる。この点も日下先生が仰る通りだったのだ。

次に反右派闘争での老舎をどうとらえるかという難関にさしかかった。これが第七章『「百花齊放」から「反右派闘争」の中の老舎』である。日下先生はこの論文を読んで、当代文学の専門の萩野脩二先生に、私を指導してくださるよう依頼して下さった。萩野先生は専門的な立場から具体的に助言、指導して下さった。そしてこの論文を評価して下さった。これが完成への大きな弾みとなった。最初に萩野先生の研究室に伺ったとき、先生は私に仰った。「あなたの先生は日下さんだよ。あなたは日下さんと出会ったから、ここまでこれたんだよ。それにしてもよくぞ日下さんに出会えたね」を伺って、私が老舎をやりたいと言ったとき、即座に日下先生を推薦されたのはF先生だったと思い出した。F先生が日下先生に橋渡しして下さり、その日下先生の7年間にわたるご指導のおかげでここまで来ることができ、その日下先生が萩野先生に橋渡しして下さったのだ。

## 5. 2010年8月盛夏・論文完成

昨年の9月、論文の最後の第九章の二稿目の講評を、日下先生の研究室で聞かせて頂いた。先生は「よくやったね。ところで中国に留学したのは何歳のときだったの」と聞かれた。「60歳

のときです。この10年間、私の60代はすべて老舎に明け暮れました」と申し上げましたら、先生は「幸せな60代だったじゃないか」と、実感のこもった声で仰った。確かにその通りだと改めて自覚した。

私をここまで導いてくださった得がたき師との出会いに深く感謝するものである。この師との出会いがなければ、この論文は完成できなかった。特に日下先生は途中体調をくずされたり、お辛いときもあった。それなのに思い込みが強く、納得出来ないことがあると、口には出さないが、顔にだす私の顔色を読んで、辛抱強く指導してくださった。日下先生のご指導のおかげで、私の60代は充実したものとなった。今後は口頭試問で助言された点を踏まえて、拙論に加筆修正を加えていきたいと、取り組み始めている。

最後になりましたが、老舎研究会に参加しておられる杉本達夫先生をはじめ、多くの先生がたの論文から貴重な示唆をいただき、また引用させていただいた。このような老舎研究の先達の研究論文のおかげで、私の論文はなんとかでき上がった。ありがとうございました。

## 老舎関係文献略目 (15)

倉橋 幸彦 (編)

【2008年・補】

渡辺武秀「老舎『張自忠』試論」

『八戸工業大学紀要』第27巻  
(2月29日) p. 125-140

宮田一郎「倉石武四郎先生」

『中国語の環』第78号 (『第65回  
中国語検定試験 受験案内』

別冊綴込、4月) p. 4-5

\*「先生の中国語研究の片鱗に触れたのは、なんとと言っても、先生の『岩波中国語辞典』の資料づくりの一端をになわせていただいたときである。わたくしは老舎の『離婚』を担当した。同書の全語彙を先生の『ラテン化新文字による中国語辞典』にあたり、同辞典の見出しにある語は付箋に記して、貼り付ける、実詞は1語を採るだけでよいが、名詞は量詞の異なる場合、動詞は賓語・補語が異なる場合など、同一名詞・動詞であっても、何度でも採る、虚詞はすべての用例を採る、同辞典の立てる積義項目に収まらない場合は、付箋に記して取り付ける…などなど、きわめて精細なマニュアルをいただき、この作業経験は、その後のわたくしの中国語研究の基盤となった。／作業に2年余の歳月を費やしたが、その間先生から疑点に対するご教示をいただいたりして、わたくしにとっては、なにものにも代えがたい2年となった。／先生の『日中辞典』の資料づくりにも声をかけていただいた。身近の日常的な1例文に、数名の中国の方がそれぞれに付けられた中国語訳が1枚のカードになっていて、それらの複数の訳を参考にして日本人の担当者が訳を決めて、先生にお出しする、先生にご意見がある場合、そのお考えを示して、担当者に再考を求められるという、たいへんに念入りな進め方であった。わたくしはこの作業を通して、自分の中国語を見る目が広がってゆくのを実感した。／先生は『岩波中国語辞典』に老舎の作品から多く引例しておられるように、北方語を重視しておられた。これは「普通話」が北方語を基礎方言としていることからして、当然であるが、上海で学生時代を過ごし[★た]わたくしは、南方語がしみついており、『日中辞典』の作業では先生を煩わすことが多かった。／例を挙げれば、“讲”である。「彼は日本語をととも上手に話す」を“他日语进得很好”として先生の許に出

すと、きまって先生から“说”にしてはどうかとお問い合わせが来る。「腰をかがめる」を“弯腰”として出すと、“毛腰”も加えてみたらどうかとご意見が来る。万事この調子で、ずいぶん先生を煩わせたが、おかげで北方語に対するわたくしの理解は深まっていった。」

#### 松本昌次「北朝鮮とのかかわりと金泰生」

『わたしの戦後出版史』（トランスビュー、8月5日）p. 265-280

\*「——しかし北朝鮮関係の本は、内容がオフィシャルなこともあって、なぜ未来社から出版されたのか、かなり唐突な感じがします。／松本 もともと未来社は、創業以来、若き日にロシア文学や築地小劇場の演劇運動に心酔した西谷能雄さんの志向もあって、ソビエト・ロシア（当時）の演劇理論書のほか、一九四九年十月に建国した中華人民共和国の芸術関係にも、関心が深かったんです。わたしが入社する以前にも、『郭沫若詩集』（須田禎一訳、一九五二・十）のほか、曹禺、老舍、郭沫若などの戯曲も出版されていて、つまりそれなりに社会主義国やアジアに目を向けていたのです。」（p. 266）

【2009年上半期・補】

#### 高橋由利子「北京自主独立教会とロンドン会

—1920年代に老舍の関わった北京の教会学校をめぐる—」

『中国文化』（中国文化学会）

第67号、6月27日、p. 14-30

◆一. はじめに／二. 老舍と教会学校／三. 当時の北京ロンドン会の動き

#### 渡辺武秀「老舍『面子問題』試論」

『八戸工業大学紀要』第28巻

（2月27日）p. 175-191

#### 吉田世志子「『百花斉放』から『反右派闘争』の中の老舍——1957年『茶館』を中心として」

『関西大学中国文学会紀要』

第30号（3月19日）p. 19-46

◆はじめに／1. 「百花斉放」への頌歌／2. 歴史に翻弄された『茶館』／3. 「反右派闘争」と老舍／4. おわりに

#### 加藤 徹『梅蘭芳 世界を虜にした男』

（ビジネス社、3月12日）

\*「梅蘭芳も、もしあと数年長く生きていたら、文革の渦に巻き込まれただろう。ノーベル文学賞が内定していた世界的作家の老舍でさえ、紅衛兵による血の暴行を受けて亡くなった（自殺説と他殺説がある）。国際的名声をもつ梅蘭芳も、もう少し長く生きていたら、文革で無傷ではいられなかっただろう。そう考えると、彼が文革の前に亡くなったことは、ある意味で幸運だったのかもしれない。／しかし、筆者は、こんな空想をするのは不謹慎だと思いつつも、もし梅蘭芳があと数年生きて文革を迎えていたら——とも思う。二十世紀の激動を生きぬいた梅蘭芳ならば、あるいは文革の中でも、凜とした見事な生き方を示してくれたかもしれない。」（p. 244）

#### 文潔若／岡田祥子訳・編「豆嘴胡同」

『新中国を生きた作家 蕭乾』

（幻冬舎ルネッサンス、4月1日）

方舟の中で、4、p. 178-194

\*「その数年間〔☆1960年代初期〕に私自身が翻訳した何編かの日本の作品は、思想的にも芸術的にもあまり優れたものはなかった。ただ戦後の日本は経済が復興したことによって、彼らの文学も世界的レベルに相当するほど高くなっていた。日本の作品を一編翻訳するたびに、私はわが国の文壇の現状に思いを馳せるのだった

た。私が好んで読んだのはやっぱり巴金の「家」、「春」、「秋」であり、老舎の「駱駝祥子」であったが、それらは彼らが解放後、任務の遂行を急ぐための義務として書いたものではなかった。沈從文は五〇年代から、やむなく筆を絶ち、一心不乱に中国の伝統文物、ことに服装史を研究整理していたが、それも決して悪いことではなかった。ただ、そんな境遇にいたためか、彼はもう二度と立派な作品は書けなかった。戦後、日本の作家たちが閉塞された状態から抜け出すと、老作家は再び筆を執り、新進の作家も雨後の竹の子のように続々誕生した。しかしわが国はといえば、絶え間なく新しい作品を世に問うてはいるものの、一体どれくらいの作品が時間の試練に耐えられるのだろうか。」

(p. 187-188)

□『新中国を生きた作家 蕭乾』の原作本：文潔若『我和蕭乾』（広西教育出版社、1992年2月）

□注16 老舎 (p. 202) 13行

□なお、『新中国を生きた作家 蕭乾』については、『中国研究月報』2009年10月号に、代田智明による書評あり。

#### 小谷野敦「キム・ギドクが開く世界」

『大航海』6月号（新書館、5月5日）

→『能は死ぬほど退屈だ — 演劇・文学論集』（論創社、11月20日）演劇編 p. 26-29

\*「一九八〇年代には、盛んに、西洋中心主義の批判が行われ、アジアやアフリカの現代文学の翻訳も出ていたが、結局は広く読まれるようにはならなかった。むしろシナやインドの古典的文学は昔から読まれていたが、現代ものでは魯迅やタゴールどまり、ノーベル文学賞をとっても、エジプトのマフフーズ（一九一二年—二〇〇六）やナイジェリアのショインカ（一九三四年—）が読まれるようにはならなかった。せいぜ

い、チュツオーラ（一九二〇—一九七）の『やし酒呑み』くらいだろう。／私など錢鐘書（一九一〇—一九八）の『結婚狂死曲』（困城）という、岩波文庫に入っていた現代小説を読んで面白かったが、巴金や老舎がそれほど読まれるというわけには行かなかった。」（p. 26-27）

（再録）

#### 楊義／星野幸代訳

「老舎作品の装幀と挿絵の文化的情緒」

楊義・張中良・中井政喜著／森川（麦生）登美江・星野幸代・中井政喜訳

『二十世紀中国文学図志』[学術叢書]

（学術出版会、6月30日）p. 452-457

■初出：『言語文化論集』（名古屋大学言語文化学部・国際文化研究科）第22巻第1号、2000年、「『二十世紀中国文学図志』（一二）（選訳）」\*「訳注（11）原文は「一九三三年現代書局版の封面上的猫城」であるが、この表紙絵は、『猫城記』（四合出版社、一九四六・七）の表紙絵である。いまこれに従い、訂正する。」

(p. 458)

#### 【2009年下半年期】

#### 本間 史「老舎」

長谷川啓之『現代アジア事典』

（文眞堂、7月20日）p. 1277-1278

#### 陳燕琪「老舎『微神』とダンテ『神曲』 — イギリス・ロマン主義およびモダニズムを媒介とする影響関係をめぐって」

『東方学』（東方学会）118、7月、p. 115-133

◆一 老舎のダンテ論とイギリス文壇におけるダンテブーム／二 Visionという題名の由来と三十五歳という「アクメー」／三 『微神』の中の「三」という神秘的数字／四 老舎の繼

愛體驗と『微神』における性愛嫌悪

『老舎研究会会報』第23号（9月5日）  
□巻末の「老舎研究会会報総目次（第20号～第24号）」参照。

高井潔司「体験的中国語奮闘記—相変わらず反省の日々—」

『トンシュエ』（同学社）第38号、  
9月20日、p. 4-9

\*「某新聞社を辞め、北海道大学の教師になったころ、本誌に「体験的 “中国語のすすめ” —挫折と反省の日々—」〔☆『トンシュエ』第25号、2003年2月15日〕というエッセーを書かせて頂いた。記者時代から辛口の読者であった女房から、「新聞社で書く社説などより、ずっと面白いね」と、珍しく褒めてもらったものである。／ところが、一部関係者からおしかりの言葉を頂いた。大学時代、いかに真面目に勉強せず、中国語ができなかったかを懺悔するつもりで、以下のように書いたのが事の発端だった。／もう一つ鮮明に覚えているのは、紛争の最中、大学祭で中国語劇「駱駝祥子」に出た時のことだ。私の役回りは端役も端役。せりふはたった一つ。最初のせりふ合わせで祥子の女房役の先輩が大笑いして言った。／「高井君、それって中国語」。／以来、私の中国語はフリーズしたままなのかも知れない。／この語劇に出演していた先輩諸姉から「そんなことを言った覚えのある人は、誰もいない」という“苦情”の声が届いた。こういったことは、言った方は何気なく言っても、言われた方がしつこく覚えているものだが、証拠もなければ、多勢に無勢、ひたすら謝るほかはない。／駱駝祥子役の島影均先輩（現北海道新聞常務取締役）に相談したら、「北海道に遊びに来たら、鮭をご馳走することで手打ちだ」ということに相成った。もともとこの約束はまだ果たしていない。先輩諸姉の北海道

上陸がまだ実現していないからだ。それについても、本誌の中国語教育界における影響力の大きさには驚いた。長年、音信のなかった先輩と、この駄文一つで再びつながったのだから。」  
(p. 4-5)

【2010年】

高橋由利子「北京自主独立教会とロンドン会（続）—老舎が北京の教会活動を離れた理由及びその創作活動への影響—」

『中国文化』（中国語文化学会）  
第68号、6月26日、p. 17-31

◆○. 本稿で取り上げること／四. ロンドン教会学校移管の動きと宝広林／五. 教会学校登録法と缸瓦市教会の要求：ウッド女史の手紙 1925. 11. 26／六. 結論

斎藤匡史「老舎小説の食譜 —

長編小説『離婚』編(上)」

『東亜経済研究』（山口大学東亜経済学会）第68巻第2号、1月31日、p. 63  
— 77

◆はじめに／『離婚』食譜186条

\*「訳文出自は、『離婚』伊藤敬一訳「中国の革命と文学4 老舎・曹禺集」昭和47年5月 平凡社刊を引用した。」(p. 63)

劉一達／多田麻美訳

『乾隆帝の幻玉 — 老北京骨董異聞』

（中央公論新社、1月25日）

\*「二十年余り前、私はまだプロの記者（訳注／著者は現在、夕刊紙『北京晩報』の記者としても活躍している）にはなっていませんでした。当時の私は、一心に作家になりたいと思っていました。しかも、老舎、フローベル、バルザック、トルストイのような作家に、です。ですか

ら、『故都子民』を創作するにあたって、とても手間暇をかけ、大きな努力を払いました。正直な話、一つの言葉を考えるのに一日費やし、一つのディテールをめぐって、一か月あれこれ考えたほどです。このような状態で創作した小説であれば、どのようなレベルのものになるでしょう。読者を失望させることがあるでしょうか？」（あとがき — なぜ『故都子民』を書いたか、p. 465）

■ところで、同あとがきの「北京風小説家の鄭友梅先生が、ご覧になった後で高い評価をしてくれました」（p. 475）の「鄭友梅」は「鄧友梅」の間違いでしょう。

\*「四合院と呼ばれる伝統的な民家が密集するこの胡同には、明清時代から民国期、そして解放後の歴史を感じさせるさまざまな痕跡があり、庶民的でどこか懐かしい風景がある。訳者はこれまで、この胡同に魅せられ、まるで憑かれたように足を運んできた。近年は、この胡同を観光地として訪れる観光客も増え、主に外国人を中心に、三輪人力車ツアーが人気を呼んでいる。／だが、そういったツアーや、胡同を写した写真集、絵葉書こそあっても、この胡同で老北京たちがどのような生活をしてきたのかを、より生き生きと具体的に想像しようとした時、その手がかりは意外と少ない。胡同文化について記した解説本や随筆は、近年中国で次々と出版されているが、小説となるとぐっと減り、日本語訳があるものとなると、更に心もとない。日本でも比較的よく知られているのは、老舎の『駱駝祥子 — らくだのシアンツ』ぐらいであろうか。／これは、ディケンズのロンドン、バルザックのパリといったような、欧米の近代都市と文学との深い結びつき、およびその日本での知名度を考えると、大きな空白であると言えるだろう。」（訳者あとがき — 眼前に広がる「オールド北京」 p. 477-478）

■「訳者略歴」：「1973年生まれ。／2000年、

京都大学大学院博士課程で中国文学を専攻していた際に北京の大学に国費留学、以来北京在住。本名、または林静の筆名で、主に文化、芸術の記事を執筆する一方、翻訳も手がける。」

張 競「劉一達著、多田麻美訳『乾隆帝の幻玉 老北京骨董異聞』

『毎日新聞』2月28日、「今週の本棚」  
→『本に寄り添う』（ピラールプレス）  
p. 357-359

\*「生粋の北京っ子には口達者の人が多い。おしゃべりが好きで、どこかユーモアがある。聞いているうちについついその話術にはまり、話が本当か嘘か見当が付かなくなる。そんな北京っ子の冗舌をそのまま文章にしたのがこの小説である。／この作品の魅力はまずその語り口にある。一口到北京語とはいえ、れっきとした方言である。本物の下町言葉は余所の人には通じにくい。その点では東京弁と大いに違う。北京の下町言葉は口頭で使われているだけで、文章にすることはできないと思われていた。この神話に初めて挑戦したのは老舎である。だが、劉一達という作家は老舎より遙かに徹底している。本来、書き言葉にならないはずの俗語を当て字を使って大胆に取り入れている。原書には多くの注がつけられているが、それでも北京以外の出身者が理解するのに一苦勞するであろう。その思い切った言語冒険のおかげで、古い北京の風俗や人々の生活ぶりは当時の空気とともに甦ってきた。」

瀬戸 宏「二つの老舎『茶館』—焦菊隱演出と 林兆華演出—」

『演劇博物館グローバルCOE紀要 演劇映像学2009 第2集』（早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム「演劇映像の国際的教育研究拠点」）2010年3月、p. 189-206

◆一 戯曲『茶館』／二 戯曲『茶館』の内容  
／三 焦菊隱演出の『茶館』――一九五八年の  
初演／四 焦菊隱演出の『茶館』二一 一九六  
三年の再演／五 焦菊隱演出の『茶館』三一 文  
革後の再演／六 林兆華演出の『茶館』／五〔★  
七〕『茶館』の新しい演出は可能か

\*「林兆華演出『茶館』は、舞台自体は不徹底なものとなったが、『茶館』を革命と切り離す新しい演出＝新しい読みを示した。中国社会状況の変化は、『茶館』を、建国以前の老舎作品と同質のものとして読むことも可能にした。／たとえば王利発自殺の意味の捉え方である。吉田世志子氏は「一九五〇年までの長編小説では……自殺させることでしか、登場人物の真摯な思いを表現できなかつたのである」と指摘している。今日では、王利発の自殺をそのようなものと考えても、何の違和感もない。『茶館』を中国革命とも北京とも切り離し、普遍性を持った人間の劇としてとらえる新しい演出＝新しい読みは可能だろうか。たとえば、近年の日本では十年以上にわたって自殺者が三万人を超え、その多くは中高年の男性である。今日の日本では、王利発と同じ境遇の人間は決して珍しくないのである。そうであるなら、『茶館』を日本人の運命を描いた劇として演じることも不可能ではあるまい。／シェイクスピアやイブセンの作品の多くが、本来はイギリスやノルウェーの地方色と密接に結び付いていることは、戯曲を読めば明らかである。しかし、今日では地方色を無視したシェイクスピア、イブセン作品上演は、ごく普通におこなわれている。上演地域の地方色を注ぎ込むこともある。／私は焦菊隱演出に代表される『茶館』と革命・北京地方色を結びつける読みに対処だということではない。焦菊隱演出は一つの形として認めると同時に、新しい演出の舞台も併存するという読みの多様性の可能性を求めているのである。『茶館』は、そのようなさまざまな上演、読み、耐

え世界に向かって開かれうる価値を持った作品ではないだろうか。／\*本稿は老舎研究会二〇〇九年度年会(二〇〇九年九月五日 大阪産業大学梅田サテライト教室)での同名の報告を、大幅に改訂したものである。」(p. 202-203)

■本誌第24号の「事務局便り」で、瀬戸会員の同論文を「二つの老舎」と誤打してしまい、本当に申し訳ございません。

#### 杉本達夫「老舎的阴阳两个面貌」

中国老舎研究会編『老舎与民族文化——纪念老舎先生诞生110周年国际学术研讨会论文集』(天津人民出版社、3月) p. 132-134

#### 渡辺武秀「老舎『大地龍蛇』試論」

『八戸工業大学異分野融合科学研究所紀要』8巻(3月24日) p. 39-52

#### 藤井省三監修

『中国文学研究文献要覧 近現代文学 1978～2008』(日外アソシエーツ、5月25日、693頁、40,000円＋税)

◆老舎(1899-1966) 214-220/張さんの哲学220/猫城記220-221/離婚221/微神221/駱駝祥子221-222/四世同堂222-223/茶館223-224/演劇・芸能526/話劇546-547/相声548

\*「私事で恐縮だが、三〇年前のこと、『中国文学研究要覧1945～1977(戦後編)』とその姉妹編である『中国文学専門家事典』が刊行された時、私は大学院博士課程の二年生で、とりあえず後者を購入したのは書代が1万3000円と前者の半分以下だったからだろう。東京郊外のアパート二DKの家賃が5万円の時代である。キッチンで夕食の用意をしながらこんな便利な本が出たよ、と噂をした私は、長女に授乳していた妻から、あなたの名前もこういう事典に出る



ことがあるのかしらと問われ、「ウーン」と天を仰いで絶句した結果、高価な『文献要覧』は入手せず、もっぱら研究室や図書館で引くこととなった。／そのような個人的な経験もあり、一昨年の『中国文学研究文献要覧 古典文学1978～2007』刊行に続く『中国文学研究文献要覧 近現代文学1978～2008』の登場には、大きな喜びと不安とを覚えている。／本書は日外アソシエーツ編集部の小森浩二氏が分類を立て、データを集めたものに私と鄧捷・藤澤太郎の両文学博士がさらに分類に検討を加え、データを補充して成ったものである。」(藤井省三「序」)

阿部幸夫「生真面目な「どたばた喜劇」——  
老舎(上)」[重慶「二流堂」始末  
——抗戦下の文芸サロン(26)]

『東方』第352号、6月5日、p.18-19  
\*「老舎と夏衍は、[☆1942年4月] 会うや「たちまち旧知のごとし」で小さな茶館で話しこむ。「わたしは国民党ではないし、共産党でもない、だれであれ本当に抗戦している人なら、その人についていきます」という、掛け値なしの生真面目なことばが老舎の真情だった。しかも老舎は重慶に来てから新たに劇作家の隊列にくわり、手を染めた演劇脚本もすでに四本を数え、この年の春節(農歴正月)に三幕戯曲『面子問題』が国泰大戲院で上演されたばかりであった。(※「幅広い統戦工作」)／老舎の処女戯曲『残霧』は一九三九年五月、日本軍機によるあの重慶爆撃の日に、わずか半月で仕上げた作という。あの『駱駝祥子』を世に送り出した直後である。馬彦祥監督が舞台にまとめて人気を博した。かれの名作小説をならべて「『二馬』のような筆法、『趙子曰』のような物語、『老張的哲学』のような作風」と評価された。「大後方の不合理現象を暴露するもの、あの洗局長はふだん権力を振りまわす好色漢、だがついには女漢奸に籠絡されて失脚し、手が後ろにまわる。ところ

が女漢奸は法網を逃れて悠然と動きまわり、さらに大物と付きあう」とする王瑤の梗概がわかりやすい。次作は宋之的と共同で書いた『国家至上』で回族と漢族が握手する救国劇だった

(またの名を『回教三傑』という)が、張瑞芳の好演が評判を呼んで当たった。これもまた馬彦祥の手で公演の運びとなり、重慶、成都の各地を賑わした。さらに五回も書き直しをした台児荘もの戯曲『張自忠』がつづき、四作目が三幕劇『面子問題』となる。小説家が手を染めた演劇脚本とはいえ、かなり手慣れてきたところであろう。この作品で、戯曲的な「場」の処理法について、またしても馬彦祥ら舞台の現場に精通した演劇人のアドバイスを容れて三度にわたって手を加えたという。そのもう一人が応雲衛[☆中国劇芸社]である。／老舎がこの脚本を書き終えたのが一九四〇年の除夕、大晦日のことである。脱稿。明けて一月四日、応雲衛と馬彦祥を招いて、自作のシナリオを自分の口で読む。親誦。ご兩人より意見聴取。再三にわたって、改稿、修訂。このプロセスにぼくは惹かれる。郭沫若の『屈原』にもこの過程があるのだが、人前で朗読して意見を求める繰り返しが演劇を育てるらしい。こうして初期的に公演準備にとりかかるのだが、その前に、まさに戦争の最中らしく、前線の将兵慰問の慈善バザーが組まれる。銃後をあずかる著名人の義務でもあろう。老舎は未公開の「戯曲手稿」をすべて提供した。因みにバザーでの人気は老舎と郭沫若に集中した。／四月、応雲衛が公演の準備をはじめ。「喜劇ですか、それとも笑劇(鬧劇)にしますか」と応雲衛がせまる。これは重要な岐路であった。老舎は前者を希望した。七月、いくつかの新趣向を加筆したいのだが果たせず、内心忸怩。いかにも生真面目な作家らしい。(※「喜劇か「どたばた」か」)

◆カット:『面子問題』手稿と初版本書影。『老舎』(北京燕山出版社、1997年)より。

老舎（下）「重慶「二流堂」始末  
— 抗戦下の文芸サロン(27)」

『東方』第353号、7月5日、p. 16-17

\* 「『面子問題』という主題を、真正面からタイトルに掲げたこの戯曲で、とてつもなく面子にこだわる主人公は、佟景銘秘書。五十歳をいくらか出たところ、そろそろ出世も頭打ちの年ごろとあって、本人の苛立ちも聞こえてこようというあたりか。遼東の佟氏といえば、由緒を糺せば夏の太史令終古までたどれる名門で、清王朝時代には英傑を輩出した名家であり、曾祖父・祖父の代までは進士という書香匂いたつ家柄だから、メンツを云々する芝居には、まずびつたりの設定である。かれが出仕する役所は、重慶も郊外にある某政府機関、大後方奥地の要衝とはいえ、にわか首都の重慶市街にとても政府機関を収容しきれぬはずもなく、郊外の移転指定区域にある庁舎らしい。佟景銘の役職はすこしばかり立場が不安定な秘書である。秘書とは、かつては貴人あるいは大臣級に直属して「機密の文書事務を取り扱う高等官」が本来のしごとだったろうが、ここでは何となく影が薄い。部長、司長（局長）、科長といった上下関係からすこし外れた幕僚部門のにおいがする。司長の下、科長よりは上といった感じ。文書の責任をもつでもなく、待命中の身分といえよいか、この年齢まで官にあってこの地位とすれば、佟家はかれの代でたしかに没落しているわけで、本人も一段とメンツの重みを噛みしめていたに違いない。時は一九四〇年秋、汪精衛の南京カイライ国民政府ができて半年後、重慶の抗戦陣営が分裂した危機的状況下と、覚えておきたい。／さて、徹夜マージャンで体調不良、気分がすぐれない佟景銘だが、昼過ぎによりやく床を離れ、午后の三時にやっとのことで役所にやってきた。ろくに仕事もしない閑職の事務官の登場。そこでぬうっと突きだされたのが、差出人不明の一通の書信であった。ボーイ

(再録)

上田美佐子「ニューヨークのラ・ママ劇場から  
の里帰り『景清／興隆』」

『曠野と演劇』（港の人、6月7日）

p. 118-121

\* 「この高瀬〔☆一樹〕のように演劇を思考する媒体として創っていかうとしていることでは、中国の演出家・林兆華がいる。この秋十月、北京の首都劇場で彼が演出した老舎の『茶館』は、しっかりと中国的でありながら、ちっとも中国的ではないのに、私は嬉しくなりました。それは林兆華が、老舎が立った淵の、同じ淵に立って歴史的現実を直視し、戯曲を読み込んでいるからこそ、老舎の生涯賭けた巨きなテーマと向き合う孤軍の焦りに戦々競々としつつも、よそ目には泰然自若とみえるアイロニカルなユーモアが、まさに中国の人々のそれとして客席の私にも伝わったのでありましよう。一方、林兆華の舞台における人物や、風物や、空気や……のそれら一切は、つくられたものであってはならず、例えば人物であれば「自然な演技をする」ことなのではなくて、「演技をしないで自然でいる」ことのわかるプロフェッショナルな俳優が要望されるというわけだ。いわば総ての、一切の皮膜を剥ぎ取り、必要とする核だけとなって正体を見透かしてみようという試みである。それは取りも直さず、中国的なものを、ナショナルなものを、束縛しているものを超えて、伝わりスパークしてくる。というように、北京で『茶館』を観たことで私は『景清／拘留』のことがいっそうわかってきたのかもしれない。」 (p. 119-120)

□初出：『悲劇喜劇』1999年12月号

■上田美佐子／シアターX（カイ）芸術監督・演劇プロデューサー。

阿部幸夫「生真面目な「どたばた喜劇」 —

というか一介の用務員が上司である私に片手で突きだす無礼、この書信を一時間半も放置して届けなかった無礼、その根本のところは周りが昇格昇任するなか私だけが秘書のままだと見くびっているらしい無礼、……。この一件ではボーイの上にいる書記を詰問したが、書記は公文書の案件で多忙です、雑用は係りじゃありませんと逆ねじを喰わされる。無礼に非礼が重なって、かれのメンツがたちまち泥にまみれて、不快と目まいが加速した。この書信、実はかれの身辺についてまわる疑惑について告発する、いわば「怪文書」に類する重要な文書で、それはラストで明らかになる。／秘書どの、体調不良でしたら医務室の医官を呼びましょう。だが多忙な医官は、看護婦を寄越しただけ。権力者の呼びつけに従わない医官は蹴首するとわめてみても、前線の将士に信頼されている医官には通じない。そんななかで次の人事異動が某所で取りざたされていた。戦時下というのに時局認識もなく、又あまりにも事務処理能力に欠ける秘書は要らないというのが、大方の評価であった。決済には時間をかけて、勿体をつけて、それにふさわしい当事者としてのメンツを保って事に当たる、それが役人というものだと、周囲にみとめさせたい佟景銘のメンツは八方ふさがりであった。「儂には抗戦がわかっていない、抗戦時期の官吏として相応しからずだと？ならば、長袍と馬褂のメンツにかけて見せてやる、儂を辞めさせられるもんか」（\*「メンツと閑職」全文）

\*「メンツについて老舎の辛辣にして幽默な筆は、佟景銘秘書ひとりにとどまらない。遺産相続でにわか成金になり、とつぜん富裕階級入りした男にほどこすメンツ教育だの、尾羽打ち枯らした昔のなかが頼ってきてなおすがりつくメンツ話などなどの枝葉末節は、この際カットするが、冒頭の例の怪文書がらみで、劇の結末が思いもよらない方向に収斂してしまうの

である。怪文書はかれを通敵行為、汪精衛カライ政権に通じていると告発していた。この書簡の発信人と意図がじつのところよくわからない。が、身内にカライ政権に趨いたものがある情況は、佟秘書を辞職に追いこむことはできても、メンツを叩き、重慶の現政権をわらいのめす諷刺劇として、却って効果を薄めはしなかったか。／追いつめられた佟景銘秘書は、体面のある死、睡眠薬自殺について医官に相談するが、医者には人助けが任務ですとかわされる。熱血医官を慕い、前線まで同行したいといひよる娘の佟小姐を「はしたない」と、なおも体面を取り繕い窘めるところで幕が下りた。／春節の国泰大戲院、昼夜公演の楽屋には、毎日、老舎の姿があった。袁世凱のとき以来。「中式の通常礼服」と決められた老舎の青い馬褂を拝借した役者（項堃）が舞台上でメンツを熱演していた。」

『老舎研究会会報』第24号（9月4日）

□巻末の「老舎研究会会報総目次（第20号～第24号）」参照。

（再録）

萩野脩二「魯迅と合わなかった、ある「支那通」」

『中国現代文学論考』（関西大学出版部、9月30日）V附録、p. 379-402

\*「澤村幸夫は、次のような反省とも言える文章を書いている。／\*さういう私も、多分、魯迅を悦ばさなからうと思ふことがある。それは昭和十年十二月のことだった。私の『支那草木蟲魚記』の続集の中に「落花生」という題で、私はユーモア作家の称のある老舎の一文を翻訳して挿んでおいた。その中で、ほんの少し彼に触れた。／左翼の老作家で、老舎よりは先輩に当る魯迅は「嫌な訪問客には、りんかけの南京豆を出すに限る。私はいつもさうすることにきめてゐる。」と、私に語ったことがある。彼

のことであるから、何か知らぬ南京豆に諷刺を寓してあるとしても、彼が南京豆そのものに敬意を有してゐないことは明かだ。この点からすれば、同じ左翼傾向を有し同じ無産の作家であるとしても、老舎の方が甚だしい傾向を帯びてみると、事の南京豆に関する限りにおいては、私は考へる。／これが魯迅の眼に入ることがあらうとは、もとより予期してゐなかつたのに、どうしたことか、場所もあらうに、人もあらうに、内山書店の店先において、彼の外に、そのころは自然科学学研究所にゐた魚の博士の木村重君、主人完造君など一味集合の席で彼の眼に入ったのである。りんかけの南京豆がさほど問題となるはずはない。が、老舎と彼とを対比したやうな私の書き方が、多分、甲論乙駁の盛んな一場面を描き出したのであらうと察する。ただ、その内報を伝へた木村君が、彼の私に対する言だけを、巧みに省略してゐたので、肝腎な点はばかれてしまつたはるだが、私はそれだけ恐縮したことである。〔☆澤村幸夫「魯迅を懐ふ」(『満蒙』23年1月号、昭和17年1月)／私は今、魯迅と老舎との関係から、つまり当時の状況から細かく検討することはしない。それを行なうに足る資料を、私は持ち合わせていない。／もとの『支那草木蟲魚記』続集の「落花生」と、ここに澤村自身に引用された「落花生」の文章とは、少しの語句の違いがあるが、殆ど同じである。老舎の一文は、西瓜子と南京豆とを比べて、前者をブルジョアみたいなものとし、後者を詩的インスピレーションを持つ安上がり物としている。老舎の方が「甚だしい傾向」を帯びているかも知れないが、これは単純で浅薄な対比にすぎないように、私には思える。「軽いユウモア」のある文というよりも、私にはやや気障な文に思えた。」(p. 395-396)  
□初出：『国際研究』(立命館大学)第6巻(1993年12月)

【2011年上半期】

石 弘之『名作の中の地球環境史』(岩波書店、3月23日)第4章 黄砂の中を走る人力車  
老舎『駱駝祥子 — らくだのシアンツ』、p. 43-56

◆あらずじ／物語の周辺／黄砂のなかを走る祥子／黄砂の歴史／黄砂と日本文学／北京を襲う砂塵暴／砂漠が広がる／巨大建造物が破壊した森林／遺骨は自然に返す

\*「春先に日本列島に降り注ぐ黄砂は困りものだ。近年、発生地である中国北西部の砂漠化の進行とともに、日本に降る黄砂も規模が拡大している。黄砂と人との関わりは深い。中国、日本では多くの詩歌によまれ、『駱駝祥子』では寒々とした北京の脇役として登場する。」

(p. 43)

\*「この作品から、当時の庶民の生活が生き生きと伝わってくる。庶民は与り知らないところで社会の激動に翻弄され、苦しい生活を強いられる。老舎はそうしたメッセージを込めながら、駱駝祥子のような市井に生きる庶民へ暖かいまなざいしをそそぐ。」(黄砂のなかを走る祥子、p. 46)

■文中の引用は立間祥介訳『駱駝祥子 — らくだのシアンツ』[岩波文庫]に拠る。

## 老 舎 著 作 版 本 考 証 『老張的哲学』(1)

倉橋 幸彦

「老張的哲学」は老舎の文壇デビュー作であり、また商務印書館から「文学研究会叢書」の一つとして出版されたその単行本が老舎の処女出版である。

さて、この初版の発行年月については、従来

ほどの書目においても「民国17年1月」のことであるとされてきた。

例えば、『老舎全集 第1巻』（人民文学出版社、1999年1月）の「本巻説明」においても、また詳細かつ正確で定評の高い張桂興編著『老舎著訳編目』（中国国際広播出版社、2000年9月）においてもしかりである。

ところが、朱金順は「探索《老張的哲學》初版時間」（『打開塵封的書箱——新文學版本雜話』秀威資訊科技、2007年8月、p13-18）において、これに疑問を呈している。

朱氏は、2005年8月に出版された『消逝的風景』（山東画報出版社）所収の唐文一「老舎的処女作《老張的哲学》」に附された『老張的哲学』初版本の「版權頁」の書影（p166）に着目する。そこには、「民国17年4月」とあり、唐氏はこれを初版本と見なしている。なお、『消逝的風景』の序において、舒乙はこの初版本に関して次のように証言している

以老舎先生的処女作短篇小说《老張的哲学》为礼，它出版于1928年，商务版，比《女神》又晚了六七年，也是遍找不到，一般的图书馆里有第二版、第三版、第四版等等，唯独找不到出版。我曾在美国几个研究汉学有名大学的图书馆里查过，都没有它的初版本。家里曾有一本，捐给了文学馆。唐弢先生的藏书里有一本，也捐给了文学馆，总之，极其稀少，这是肯定了的。

唐文一は、中国現代文学館の館員であり、同館が所蔵する二冊の「初版本」どちらかの「版權頁」書影を用いたのである。因みに、唐弢寄贈本の「封面」は于潤琦編著の『唐弢藏書』（北京出版社、2005年1月）に紹介（p95）されているので、そちらを参照していただきたい。

ところで、舒乙が「极其稀少」と断定した（4月）初版本であるが、どのような経路で入手し

たかは失念したが、筆者の手元にも一冊存する（もともと筆者所蔵のものは、中国の古書界では「館蔵」と称されるもので、本の背にラベル添付されているもので、古書としての価値は低い）ので、この「4月」初版本について少し詳しく記しておこう。

### 老張的哲學〔文學研究會叢書〕

中華民國17年4月初版

商務印書館(上海棋盤街中市)

12.9×19 cm 351頁 大洋壹元

\*「版權頁」の後に、「文學研究會叢書」の広告2頁を附す。

さて、中国現代文学の版本考証にかけては「打破砂鍋問到底」である朱金順はこの二種の初版本の存在、つまり「1月本」「4月本」に対して二つの推論を立てている。

一つは、「4月」初版本が世に知られることが少なく、後の再版以後の「版權頁」において初版本の発行年月を「民国7年1月」と誤って印刷され、それが今日にまで踏襲されている。その一例として朱氏は、民国17年11月発行再版の「版權頁」の書影（p15）を例示している。確かに、筆書所蔵の民国18年3月発行の三版の「版權頁」においても「民国17年1月初版」とある。なお、再版は確認できていないが、三版では「4月初版」にはなかった初めの頁に「文學研究會叢書 1927」とあるのは日下恒夫が指摘する通りである（「解説『張さんの哲学』について」、『老舎小説全集1 張さんの哲学・離婚』学習研究社、1982年1月10日、p496）。

もう一つは、「20年代から40年代にかけて、一つの書店が本を出版する際、前後して二種の初版本を印することもあった」というものであり、「1月本」の存在を完全には否定することもできないというものである。ただし、この「1月本」の存在を明らかにする証拠が現段階でな

いわけであるから、朱氏自身も認める通りこの推論は説得力を持たない。

『老張的哲学』の初版は「中華民國 17 年 4 月商務」に訂正されなければならない。

再版・三版については上に見たとおりであるが、その後の版本について簡単に触れておこう。

〈商務版〉

◆ 中華民國 21 年 12 月國難後第一版

(定価：大洋壹元貳角)

◇ 中華民國 23 年 4 月國難後第二版

\* 舒济〈老舍著译录(初稿)〉(1978)と《中国现代作家著译书目》中国文献出版社、1982 年 12 月)に拠る。

以上は、初版と同判型。

◇ 民國 24 年 10 月渝第 1 版

(32 開本、237 頁)

\* 上海图书馆蔵

◇ 民國 28 年 3 月三版

\* 舒济〈老舍著译录(初稿)〉(1978)に拠る。

◇ 民國 32 年 10 月初版

(商務印書館(重慶)、32 開本、237 頁)

\* 舒济〈老舍著译录(初稿)〉(1978)と《中国现代作家著译书目》に拠る。

◆ 中華民國 33 年 4 月贛縣第一版

(商務印書館(重慶白象街)、32 開本、237 頁)

同書には、「文學研究會叢書」の断りなし。

◆ 中華民國 36 年 2 月第四版

(商務印書館、32 開本、351 頁)

表紙では、題名の上に〔新中學文庫〕と表記。

初めの頁に「文學研究會叢書 1934」とある。

以上◆で示した架蔵本三冊の奥付では、すべて初版を「中華民國十七年一月」とする。

〈晨光版〉

◆ 『老張的哲學』〔晨光文學叢書第 17 種〕

1948 年 1 月晨光版初版

(32 開本、237 頁、定価：國幣 20 元)

\* 《中国现代作家著译书目》が「晨光文學叢書第 18 種」とするのは誤記。

\* 舒乙〈老舍和商务印书馆〉(《商务印书馆九十年——我和商务印书馆》商务印书馆、1987 年 1 月)：“赵家璧接手筹办这家公司之后，按老舍原意，开始编辑出版老舍的各种著作。当时并未打出《老舍全集》的旗号，但实际上是由“晨光”出版一整套老舍作品，由各个单行本和集子组成，外部装帧格式统一，将来汇总起来，就是一套全集。由于所有的老舍著作都必须由“晨光”出版，赵家璧开始向出过老舍著作的出版社办交涉，希望他们将版权转让给“晨光”。他首先问了“商务”。“商务”断然拒绝，理由是没有先例。“商务”的书从来是由“商务”出到底，没有半路让给别人出的。赵家璧无法，写信到美国，向老舍求救，如果全集少了《老张的哲学》，《赵子曰》，《二马》，那还叫什么全集啊？赵家璧还建议由老舍自己出面求郑振铎先生从中帮忙说清。此计果然凑效，郑振铎先生出面之后，“商务”爽快地答应了，让出这三部书的出版权，条件只有一个：写上某年某月“商务印书馆”初版。”それゆえ、晨光初版の奥付にも「一九二八年一月商務版初版」の記載あり。

◇ 1948 年 9 月再版

\* 舒济〈老舍著译录(初稿)〉(1978)に拠る。

◇ 1948 年 11 月再版

\* 以下の三版奥付による。

◆ 1949 年 4 月三版

(32 開、252 頁、定価：9 元)

〈満洲国版〉

◆ 康德 10 (1943) 年 11 月 15 日

盛京書店(奉天市瀋陽區一心街 5 段 28 號)

(32 開、268 頁、2 元 5 角)

\* 「我怎樣寫老張的哲學」を附す。

なお、版本の異同については次回にて。

# 『老舎研究会会報』 総目次(第20号～24号)

## 第20号(2006年9月1日)

会報が20号に達するとき

杉本達夫 p1-2

『老舎研究会会報』第20号発行を記念して

森本まみ子 p2-3

『老舎研究会会報』総目次(第1号～19号)

p3-7

老舎与北京(中文)

関紀新 p8-13

\*附:関紀新(現中国老舎研究会会長)略歴  
聊城の老舎国際シンポジウム報告

杉本達夫 p13

老舎消息(◆第2回 老舎記念館への寄付金贈  
呈式)

杉本達夫 p14

『老舎全集』所収「駱駝祥子」校読(2)

小生常談 p14-16

\*[第4～6章]

老舎関係文献略目(10)

倉橋幸彦(編) p16-19

\*【2000年・補正】【2001年〈上半期〉・補】  
【2002年〈上半期〉・補】【2003年〈上半  
期〉・補】【2003年〈下半期〉・続】

“補白”老舎(3)

辛彦 p19-20

\*カット:老舎題詞(『上海文化』第3期)

事務局便り(C) p20

## 第21号(2007年9月1日)

【ロンドン通信】

イギリスのお墓—老舎ゆかりのエヴァンスと  
リースのお墓を探して

高橋由利子 p1-4

◆1. まえがき/2. お墓の見つけ方/3.

エヴァンスのお墓/4. リースのお墓/5.  
あとがき

\*カット三葉:エヴァンスのお墓のある教会  
/Lin Bakerさん/リースのお墓

【上海通信】

上海の老舎—老舎とはゆかりのない上海の古  
書肆で老舎を探して

倉橋幸彦 p4-5

『老舎全集』所収「駱駝祥子」校読(3)

小生常談 p6-7

\*[第7～9章]

老舎関係文献略目(11)

倉橋幸彦(編) p7-18

\*【2004年〈上半期〉】【2004年〈下半期〉】  
【2005年〈上半期〉】

本誌19号の訂正と追記 p18

“補白”老舎(4)

辛彦 p19

老舎通信(X) p20

事務局便り(C) p20

## 第22号(2008年9月15日)

舒済さんの上着

倉橋幸彦 p1-2

舒済女士略歴並びに編著書目

倉橋幸彦(編) p2-4

老舎研究会年会発表報告記録 p4-6

『老舎全集』所収「駱駝祥子」校読(2)

小生常談 p6-8

\*[第10・11章]

\*附:第21号「『老舎全集』所収「駱駝祥  
子」校読(3)正誤

老舎関係文献略目(12)

倉橋幸彦(編) p9-17

\*【2005年〈上半期〉・補】【2005年〈下半  
期〉】【2006年】

会員消息

醒眼 p17-20

事務局便り (C) p 20

**第 23 号 (2009 年 9 月 5 日)**

五十二而知使命

倉橋幸彦 p 1-3

- ◆ 1. 老舎研究会略史 (研究会成立前史を含む) / 2. 会の性格 / 3. 会の活動

紀念老舎先生誕辰 110 周年国際学術研討会

参加二則

- 1. 「老舎の二つの顔 (老舎的阴阳两个面貌)」というわたしの発言

杉本達夫 p 4-5

- 2. 「龍鬚溝」をめぐる

布施直子 p 5-7

- ◆ 1. はじめに / 2. 1953 年の「龍鬚溝」と 2009 年 (新版) 「龍鬚溝」 / 3. 「龍鬚溝」をめぐる

「胸のつかえ」の行方 - 関紀新著『老舎与満族文化』に触れて -

杉本達夫 p 7-9

『老舎全集』所収「駱駝祥子」校読 (5)

小生常談 p 9-11

- \* [第 13 章 ~ 16 章]

老舎関係文献略目 (13)

倉橋幸彦 (編) p 11-20

- \* 【2007 年】 【2008 年上半期】

事務局便り (C) p 20

**第 24 号 (2010 年 9 月 4 日)**

再談 “晨光出版公司与老舎”

倉橋幸彦 p 1-3

滬書通信 - 上海で老舎を買う

倉橋幸彦 p 2-3

『老舎全集』所収「駱駝祥子」校読 (6)

小生常談 p 6-11

- \* [第 17 ~ 24 章] [校読を終えて]

老舎関係文献略目 (14)

倉橋幸彦 (編) p 12-19

- \* 【2007 年・補】 【2008 年 (上半期)・補】
- 【2008 年 (下半期)】 【2009 年 (上半期)】

『老舎研究会会報第 23 号』正誤 p 19

“補白”老舎

辛彦 p 19-20

事務局便り (C) p 20

**事務局便り**

◇2010 年度大会は 9 月 4 日 [土] に、大阪産業大学梅田サテライト教室 (大阪駅前第三ビル 19 階) で開催されました。

◇当日の発表者とテーマは次の通りです。

石井康一 「改革開放 30 年、老舎『茶館』は今どうなっているか」

石井会員のご報告の後に、DVD 『三十九集電視劇 茶館』のほんのさわりを鑑賞。

休憩をはさんで、

渡辺武秀 「重慶時代の白話劇作品」を読んで

なお当日、平松圭子会員から青島の駱駝祥子博物館についてのご報告もいただきました。

◇今号は「25」という節目の号ですので、例年より 4 頁増の特別号といたしました。ご寄稿賜りました会員諸氏に心より感謝申し上げます。

◇総会での承認も得ずに、事務局を下記の住所に移転いたしましたことをご了承下さい。

これは、「しだらない代表委員」を慮っての渡辺武秀会員のご好意によるものであること、ここに一筆添えて置きます。

(C) 2011 年 8 月 20 日

**老舎研究会会報第 25 号 (2011 年 9 月 3 日)**

〒031-0814 青森県八戸市妙字大開 88-1  
八戸工業大学 基礎教育研究センター  
(渡辺) 研究室 老舎研究会事務局  
TEL : 0178-25-3111 (代表)